

対馬学フォーラム 2017 に関する報告

笹川 貴吏子

1. はじめに

本稿は、2017 年 12 月 10 日に行われた「対馬学フォーラム 2017」に関する報告である。以下に、今年度の対馬学フォーラム 2017 と、その前日に行われたエクスカーシヨンの詳細について記していきたい。

2. 12 月 9 日：エクスカーシヨンの せんだんご製造見学ツアー

今年度の対馬学フォーラムでは、前日 12 月 9 日に、対馬島内をめぐるエクスカーシヨンの実施された。エクスカーシオンでは、対馬特有の発酵食品であるせんだんごについて学ぶ「せんだんご製造見学ツアー」と、龍良山原生林周辺をめぐる「龍良山原生林・ツシマヤマネコ野生順化ステーション見学ツアー」の 2 つのコースが用意されており、私は前者の「せんだんご製造見学ツアー」に参加した。

本ツアーのテーマであるせんだんごとは、サツマイモを原料とする対馬特有の発酵食品である。対馬では、古くからサツマイモが「孝行芋」と呼ばれ、飢饉から人びとを救う作物として大切にされてきた。しかしながら、サツマイモは傷みやすく保存が難しいという問題があることから、その解決方法としてサツマイモのデンプンを取り出してせんだんごにすることで、長期の保存が可能となった。せんだんごは、対馬の食文化を支える食材として広く知られている（独立行政法人農畜産業機構 2012）。

当日は、厳原町の対馬市役所前に集合し、バスに乗って今回のフィールドである豊玉町へ向かった。本ツアーへは、翌日の対馬学フォーラムの参加者を中心とした 30 名程度の参加者がおり、移動中のバスの中で順に自己紹介を行った。

豊玉町では、現在でもせんだんごをつくっている地域の方のご自宅を訪れ、せんだんごを作る際に使用する道具やせんだんごの制作過程を見学させていただいた。道具には、サツマイモを洗ったり、スライスする機械の他、粉碎してさらに細かくするための石臼が見られた。せんだんごは、2 か月という時間と複雑な工程を経て作られる。これらの工程の最終段階が、「鼻高団子」という状態であり、家々で天日乾燥される様子は対馬の冬の風物詩となっている。

その後、地区の集会所へと移動し、せんだんごを使った郷土料理である「ろくべえ⁶」を地域の方と一緒に調理して食べた。途中、「ろくべえせぎ」と呼ばれる道具を使って、ろくべえ作りを体験させていただいたが、これがなかなかコツのいる作業で不器用な私には難しかった。対馬に通い始めて 5 年になるが、ろくべえを食べるのは今回が初めてであった。初めて食べたろくべえは、こんにゃくのような不思議な触感でとてもおいしかった。場の

⁶ せんだんごからつくられる対馬の郷土料理で、農繁期にエネルギー補強食として食された。「ろくべえせぎ」と呼ばれる器具で、麺状にしたものをゆで、魚や地鶏で出汁をとった汁に入れて食す（対馬市 2015）。

空気感や匂い、音、手触り、人との出会いなど、現場で得る学びは研究室の中だけでは決して得られないものばかりで、フィールドワークは感性と身体性の学問なのだと改めて実感した。

また、エクスカージョンでは、地域の方だけでなく、対馬にてせんだんごの研究に携わっている東京農業大学の内野昌孝教授にもご説明いただいた。せんだんごの製造には、手間がかかるため、年々せんだんごをつくる家庭は少なくなっているそうだ。内野教授は食文化の継承を目的に、せんだんごの製造期間を短縮する研究を行っているという。理系の分野から地域の食文化や伝統を守るというアプローチは、文系の私には大変刺激的であり、このような学問領域を超えた学びは対馬学フォーラムならではの学びであると感じた。

3. 12月10日：対馬学フォーラム2017

対馬学フォーラムとは、地域内外の様々な人びとが、対馬という地域に関する研究成果を発表する場である。午前は地元の小中高生による発表があり、午後はポスターセッションと同時開催イベントが行われた。2017年度は、60件のポスター発表の他、同会場にてASCM（アジア保全医学会）によるアジア初の「第1回アジアのヤマネコ保全ワークショップ」も開催された。

〈午前の部〉

小学生の発表では、対馬市立厳原北小学校、対馬市立久田小学校、対馬市立豊小学校の3つの学校の発表が行われた。どの学校の発表も昨年と同様にレベルが高く、地域の方へのインタビューのみならず、skypeを駆使して島外の児童とやり取りをする学校も見られた。立教大学ESD研究所との連携について言えば、今年度研究連携を行った対馬市立久田小学校が発表をしており、内山地区を中心としたフィールドワークでの学びを紹介する様子が見られた。また、中・高生の発表では、対馬市立東部中学校と長崎県立上対馬高等学校の発表が行われた。

大学生の発表では、東京大学大学院教育研究科修士課程の眞岩哲史氏が報告を行った。眞岩氏の研究は、対馬市を事例とした離島地域の高校生のUターン意識をテーマにしたものである。発表では、郷土学習の効果と高校生のUターン意識の関係が提示され、郷土学習が生徒のUターン意識の促進に一定の効果があることを認めながらも、最終的な判断は保護者の意識によって規定されてしまうという結果が明らかになった。

この結果は大変興味深いもので、「教育の対象」について改めて考える機会となった。ESDにおいては、その学びの主体や実践の場は学校教育や社会教育に限らないあらゆる学びの場が包摂されるといわれている（阿部 2017）。それにもかかわらず、その対象が依然として学校教育に偏っていることは、これまでも指摘がなされてきた（鬼頭 2012）。以上に鑑みても、真に持続可能な社会を目指すうえで、大人の学びについても思いを巡らせることは重要であり、今後ますます求められていくに違いない。対馬学フォーラムが、子どもたちのエンパワーメントの役割を果たしているのと同様に、その場にいた保護者にとっても地域について学ぶ機会として寄与しているように、そこでの学びが保護者に今後どのような影響を及ぼすのかが非常に気になった。

〈午後の部〉

午後の部では、ポスターセッションや同時開催イベントとして出張オープンキャンパス、ASCM（アジア保全医学会）による「第1回アジアのヤマネコ保全ワークショップ」が行われた。また、筆者自身も、2017年9月にESD研究所の企画で実施された「写真ワークショップと地域創生」について、共同研究としてポスターを作成し、発表を行った。ポスターセッションについては、主に以下のものを聴講した。

静岡大学「守るべき「対馬の自然」とはなにか 一日常の暮らしの中で構築された「自然との付き合い方」から考える」

本報告は、自然環境とは単体で成り立つものではなく、当該地域の社会環境や人びとの暮らしとの関係性の中で成り立つものとして、人と自然の関係性に着目して行われた研究である。発表者は、地域での丹念な聞き取り調査から、対馬の人びとの「自然との付き合い方」を明らかにしている。また、その結果をもとに、現在、対馬に生きる人々と自然の関わりについても有意義な教訓を示している。

本報告は、社会科学的の観点から環境というテーマにアプローチした数少ない報告であり、同じ社会科学をバックグラウンドに持つ筆者にとって大変興味深い研究であった。今後、このような環境社会学や環境教育、環境人文学の分野の研究者の参加が増えることに期待したい。

長崎県立対馬高等学校、対馬しまづくり推進部市民協働・交通対策課「『ESD 対馬学』による学習効果に関する考察」

本報告は、対馬高校において2017年度より新たに始まった「ESD 対馬学」の成果をまとめたものである。ESD 対馬学の中で生徒たちは、外部講師によるリレー講義やグループワークを踏まえ、地域の高齢者28名へインタビューを実施している。インタビューの成果は、新聞記事として編集され、文化祭などで広く発信されたそうだ。学校と地域、行政といった様々なアクターの協働のもと完成した新聞記事は読み応えがあり、関係者間での相互の学びの様子が窺えた。今後、この取り組みがどのように発展していくのかが非常に楽しみである。

4. まとめ

今年度の対馬学フォーラムは、2日間にわたって開催され、昨年を超える盛り上がりを感じた。地域や学問領域、世代を超えた参加者による学びの場はとても刺激的であり、今年もまた深い学びを得ることができたように思う。地理的な距離などもあって、九州地方の学生のように定期的に対馬へ足を運べるわけではないが、それでも一年に一度の訪問を重ねていく中で新たなつながりが生まれ、輪が広がっているのを実感している。このような関係性を糧に、引き続き自身の研究に励みたい。

【参考資料】

阿部治，2017，『ESD の地域創生力』合同出版．

独立行政法人農畜産業振興機構，2012，「サツマイモが原料の対馬の郷土料理」，独立行政法人農畜産業振興機構ホームページ（2018 年 3 月 12 日取得，
https://www.alic.go.jp/joho-d/joho08_000141.html）．

鬼頭秀一，2012，「持続可能な開発のための教育（ESD）の意義と課題——環境倫理学を踏まえて」国民教育文化総合研究所『2012 年 2 月 18 日 ESD（持続可能な開発のための教育）シンポジウム』国民教育文化総合研究所 4-30．

対馬市，2015，『学生実習の手引き——対馬の歩き方』対馬市．

対馬市，2017，『対馬学へようこそ——対馬学フォーラム 2017』対馬市．

（ささかわ・きりこ 立教大学大学院社会学研究科博士後期課程／同 ESD 研究所 RA）